
森の国のアリス

甲斐仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

森の国のアリス

【NZコード】

N2341D

【作者名】

甲斐仁

【あらすじ】

そこは、日本の田舎。アリスは一人、森の中を続く一本道を歩いていた。アリスは森の奥に、一人の青年を見つける。その後を追いかけると・・・。可愛らしい少年の双子。ほのぼのとした、青年。落ち着いた渋いおじさま。ちょっと変な帽子青年。出会いが出会いを呼ぶ、少し奇妙な世界へと迷い込んでしまう。そして自分のことを知るとき、アリスは・・・。

1、双子少年

ぽかぽかと暖かい陽射しの中、アリスは大きなバスケットを手に歩いていた。

日傘をさし、とんとんとリズムを取るように軽やかに歩していく。ここは日本のド田舎。真夏の今そこここで蝉がうるむく泣いている。アリスは今、丁度地元の森を抜ける最中だつた。細く続く一本道を、うきうきと歩いていく。

アリスは、ふと足を止めた。

視界の端に、さらりと煌く何かが写ったからだ。

この森の中、なんだろう・・・と、少しだけ気になつて、煌いた方へ顔をむけた。

「わあ・・・」

そこには、一人の青年が立つていた。煌いて見えたのは、青年の濃い金色の髪だったようだ。

「だれかな・・・」

この近辺では、見たことがない。外人だらうか。

青年は、ふとアリスの視線に気づいた。

「貴様は・・・」

「・・・わあ」

綺麗な、声。低く透き通るような、心地よい重低音だ。

しかも、その容姿は目を見張るものであり、それぞれのパートがこれ以上ないほど整つている。

睫、長いなあ

「かつこいい、ひと」

「・・・」

青年は、少しだけ目を細めると、黙つて踵を返した。

歩き出す青年を、アリスは慌てておいかける

あとから考えれば、なぜ一本しかない道をはずれたのか。なぜ、追いかけようと思つたのか、わからない

それでも、あのとき、青年を追いかけた事実は・・・もう、消すことのできないのだ。

「・・・あれ？」

ふと気づいたアリスは、周囲を見回した。
どれも、同じ木・木・木。
もしかして、迷子になってしまったのだろうか。

きゅ、とアリスはバスケットを抱えた。

少しだけ、心細い。でも、あの、金の髪の青年を探したかった。
会いたい。あの、綺麗なひとに。

そのとき、ふと歌が聞こえた。

妙な歌だ・・・。

「あれ、女の子がいるよ」

「あれ、女の子がいるね」

容器な声に振り向くと、同じ顔が一つ。
にこにこと微笑んでいた。

「あの、貴方たちは・・・?」

驚くアリスに、まだ歳若い少年一人は、ずいっと一步進み寄る。

「僕は、ドルダム」

「僕は、ドル『ディ』」

「ダムつて呼んでよ」

「僕は、『ディ』だよ」

「・・・・ 双子なのね」

「うんそう」

「双子だよ」

えへへ、と笑うと、ドルダムとドル『ディ』はアリスに抱きついた。

「きやつ」

「ねえ、お姉さん。一緒に遊ぼう?」

「ね、お姉ちゃん。一緒に遊ぼう?」

「今は、駄目よ。私、金髪の男の人を探しているの
え?と少年一人は目を瞬いた。

「お姉さんの、知り合い?」

「お姉ちゃんの、恋人?」

「ううん、知らないひと。ダムくんと『ディ』くん、知らない?」
知らなーい、と二人は声を合わせて首を横に振る。

「遊ぼうよ」

「遊んでよ」

「また、今度ね」

「ごめんね、と誤ると、双子がむう、膨れる。

「やだやだ、遊ぶう」

「遊ぶのお

困ったアリスは、よしよしと双子の頭をなでた。

「ねえ、後で遊ぼう?『ごめんね、ダム、『ディ』

膨れていた一人だが、ふと『ディ』が顔をあげた。

「じゃあ、金の髪のひとが見つかったら、遊んでくれる?」
ダムも、ゆっくりと顔をあげる。

「だつたら、知つてるかもしない人、教えてあげる」

「えつ、教えてほしい・・・」

「じゃあ、あとで絶対遊んでね」

「約束だよ、お姉ちゃん」

につこりと笑う双子に、アリスも笑った。

「そうだ、お姉さん名前なんていうの?」

「うん、お姉ちゃんの名前しりたい!」

「私は、アリスよ。神葉あります」

え、と双子は田を見張るのがわかつた。

「「本名? ?」」

声を合わせる双子に、アリスは微笑んだ。
自分でも少し変わった名前だと思つけれど、本名なのだから仕方
がない。

ちなみに、平仮名で「ありす」と書く。

「可愛い名前だね」

「うん、可愛いね」

「ありがとう」

アリスは、それから絶対にあとで遊ぶから、といつ約束をして、
金の髪の青年について尋ねた。

「多分、蒼がしつてるよ」

「そうだね、蒼なら知つてるよ」

「ああ?」

アリスは、少し首をかしげた。

すると、双子は軽やかに歌い始めた。

「この森を、もつと真っ直ぐ行くんだよ」

「そしたら、お花畠にでるよ」

「そこに、蒼はいる」

「蒼は、物知りだ」

「あります、君はどうだろ?」

「受け入れて、もらえるかな?」

「またね、あります」

「またね、あります」

「あとで、遊ぼう」

歌いながら、双子はじやあねと走つていつてしまつた。

待つて、と後を追おうと試みるが、既に森のどこかへ姿を消してしまつたようだ、すぐさまシンとした沈黙がおりた。

「こっち、かな・・・」

アリスは、双子は示した方角へ向かい、歩くことにした。そのとき、ふと思つたのだ。

あの子たち、日本人？

ここで、引き返すべきだったのだろう。

けれども、アリスは先へと進みだした。

1、双子少年（後書き）

連載です。まだ続きますが、宜しくお願ひします。
感想などいただけると嬉しいです。

2、森の青年

だんだんと、森の奥へと進むアリス。

道などなく、山道ともいう草木が生い茂る場所をただ進んでいく。
けれども、中々花畠には着かない。

アリスは、一度立ち止まり後ろを振り返った。
もしかして、真っ直ぐ歩いてないのかも知れない。

横にそれてしまっているかも・・・。

それでもアリスは自分を信じることにして、歩くことにした。

そして、願いが通じたのか。

ふと、甘い香りが花をくすぐったかと思うと、森が抜けて広い花畠に出た。

「わあ・・・」

一面が、赤・黄・青・紫などの虹色をしていた・・・と思われる、
場所だった。

つまり、以前はさぞ美しかったであろう、花畠。今は見る影もなく、
あどこちで萎れていったり、枯れていたり。

「可哀想・・・」

お花畠を横断しながら、アリスは花たちの姿の胸が痛む。
かつては美しかったであろう花畠は、無残な姿となつており、こ
のまま枯れてなくなつてしまつても時間の問題ではないだろうか。

アリスは、ハツと目的を思い出した。

そうだ、金髪の男を探すために、蒼というひとを探していたのだった。

きょろきょろと辺りを見回すが、枯れた花たちばかりで人の姿などない。

ずっと歩きっぱなしで疲れていたが、それでもアリスは広い花畠を歩き続けた。

実際、森がいきなり開けて広大な花畠があるなど、不可解この上ないが、アリスは蒼を探すことに必死なのと、目の前の悲惨な状況にすっかり失念していた。

前方には高い山があり、花畠の向こうにはひとつだけ家が見える。この森の奥にある開けた場所は随分と広く、花畠を過ぎても、どうでもどこまでも歩いていた。

「あら・・・あそこかな?」

花畠を過ぎたところに、小さな家があった。
先ほど、花畠から見えた、あの家だ。
あそこにいるかもしれない。

アリスは、小さな家へと駆け寄った。

さすがに歩き続けて、少し息が上がってきていた。

「すみませんー」
トントン、ヒドアをノックする。
が。

「留守、かな」

なんとなく周辺を確認してみると、煙突から煙が出てこるのが見えた。

「誰か、いるよね……。 分。 ……え？」

もう一度きょろきょろと辺りを見たアリスは、ドアの下にバスケットがあることに気づいた。そして、よくよく見るとドアの下部で、更に小さなドアがついている。

アリスはしゃがむと、小さなドアノブを回してみた。力チャ、と小さなドアは開く。

「開いた……でも、20センチくらいしかない」「どうやつてこのドアから入るのだらう?」
「このバスケットも、どうして……」

バスケットには、畳置きの紙がおこしてあった。

「えと……」「このクッキーを食べれば、小さくなれます?」
身体が、だらうか。だとすると、この扉から入ることができる。
「……ちょっと密しいけど」
物は試しだ。

少しだけ、齧つてみよう。

「あ、おいしい!」

お腹もすいていたし、一口食べたクッキーはアリスの口の中ですぐに無くなった。

折角だし、もう一口、と口を開けたとき。

「…………え?」

むくむくむく、と身体がどんどん縮んでいく。

「嘘……」

なんと、アリスは身長一メートルほどまで縮んでしまっていた。

「・・・凄い」

もう少し縮めば、小さなドアから入れる。

アリスは、もう少しだけクッキーを齧つた。

すると、一度ドアを通れるほどまで身体が縮小した。

アリスは、残りのクッキーをポケットにしまって、小さなドアから家へと入つていった。

「ほんにしほまー」

ひょこっと顔を出して、中を覗き見た。
だが、どれも巨大でよくわからない。
と、思つていると・・・むくむくむく・と身体が大きくなりはじめた。

と思つと、すぐに元の大きさに戻つたようだ。目線が、いつもと同じじところであった。

アリスは、改めて周辺を見た。

「わあ、可愛い」

部屋の中は、とても暖かな雰囲気が漂つていた。

キッチンではこぼこぼと鍋が音を立てており、傍には小さなリビングがあつた。リビングでは丸くて赤い机がひとつ、小さな椅子が三つ。

アリスは、失礼しますーと言つて中へと身体を滑り込ませた。

「わあ、何をつくつてゐるのかな」

台所へと行くと、オープンで何かが膨らんでいた。ケーキだろうか? とてもいいにおいがする。

「蒼さん、 いますかー?」

アリスは、少し声を張り上げた。

見当たる範囲には誰もいないし返事もない。

けれど、この部屋以外に部屋はないようだし、外から見た感じ小さな家だったので、一階もなさそう。

じゅぢゅ、本当に誰もいないようだ。

「あれ・・・」

赤い机の上に、小さな箱があった。

その箱から、オープンから漂つ匂いに負けず劣らずおいしそうなにおいがする。

「・・・なんだろ」

覗きこむと、そこには小さなパンケーキがあった。

一口そこそこのそれは、可愛らしいトッピングがしてあり、空腹なアリスにとつては涎が止まらない。

「食べたい・・・」

けれど、ここは他人の家。勝手に入つただけでなく、お菓子まで食べたら絶対に犯罪だ。

「・・・・・でも」

凄く、いいにおいがする。食べたい。

「・・・一口、だけ」

空腹の誘惑と甘い香りには勝てず、ちょっとだけと言ひ聞かせてひとつ食べた。

予想よりはるかに美味しく、至福のときを過ごしたアリスだが・・・それは、一時の幸せに過ぎなかつた。

身体の異変に気づいたのは、それからすぐだつた。
むくむくむく。

「きやつ」

徐々に身体が大きくなり・・・それは、天井にぶつかるまで止まらなかつた。

丁度天井のところで腰を曲げ、腕は窓から突き出した状態となり・・・一瞬にしてぎゅうぎゅう詰まってしまったアリスは、己の軽薄さを後悔した。

「あれは・・・大きくなるパンケーキだつたのね」

しょぼん、と呟いたときだつた。

「あれ? お姫さんかな」

青年の声が、した。

どうやら家の外のようすで、アリスは視線をめぐらせる少女の姿を見ることができない。

「あの、助けてもらえますか? パンケーキ食べちやつたの。」めん

なさい」

「ああ、パンケーキか。あれは永遠に効くようになってしまったから、勝手には元にもどらないよ」

「えつ」「

びしじょう

「泣かないで。机の上に、もうひとつクッキーの箱があつたでしょう?」

声に導かれるように、部屋の中の机を見た。

「何もないけど。パンケーキしか・・・あ、机の下に箱がある」「ああ、それだよ。そのクッキーをお食べ。元に戻れる」アリスは、促されるままクッキーを一枚指につまんだ。小さなソレは掴みにくかったが、それでも必死に持つて口へと放りこんだ。

「・・・やつぱり、美味しい」

と、思つていると、すぐに身体が縮みだした。

元の標準サイズとなり、アリスはほつと一息つく。

「元に戻ったね、よかつたよかつた」

かちや、と鍵穴が動き、小さい方ではない、標準サイズの扉が開いた。

現れたのは、鍵をもつた一人の青年だった。

けれども、森で見た絶世美貌の青年とは違つ。むしろ、対照的だった。

眼は鋭くなく、優しげに細められていて。髪は金の長髪ではなく、茶色の短髪。背は高いが、ほのぼのとした雰囲気が漂っている。

「あの、『ごめんなさい』。ありがとうございます」「いえいえ、どういたしまして。そしていらっしゃい、お密さんなんて久しぶりだ」

「ひつひつと微笑む青年に、アリスも微笑んだ。

「あなたが、あの、蒼さん……？」

「違うよ。私は、バロヴィルク。この家に住んでる、料理好きなお兄さん。バロでいいよ、呼びにくいだろ？」

「バロ、さん。あの、突然なんですけど、蒼さんといつ方ご存知ではないですか？」

「アオ、とはアイリオのことかな。つまり、芋虫」

「いもむしー？」

「彼は、物知りなひとでね。でも、危ないよ。彼は変わり者だし、容赦がない。もしかすると、女王に突き出されるかもしれないよ」

「・・・女王さま？」

さつぱり意味がわからない。そもそも、芋虫って？

「今ね、この国は女王陛下の支配下にあるんだよ。花畠も、枯らされた。湖も、干上がった。城以外は曇りの日が増えて、森は歪みあちらと時折繋がるようになった」

「？？」

「ああ、？マークを浮かべて・・・わかりにくかったかな。けれど、女王陛下を知らないなんて、君は珍しいね。純粋なのかな」

「それで、あの・・・芋虫って？」

「芋虫は、アイリオのこと。そういう種族なんだよ。会いたいなら、案内するけれど・・・気に入られるかは、保障できないな」

苦笑されて、アリスは少し考えた。

もし、怒らせて、その女王陛下といふひとに突き出されたらどうしよう。聞く限り、怖い人のようだし。

「ちょっと怖いけど、お願いします。アオさんに、会いたいです！」

アリスは思い切つて言つと、バロは微笑んで、じゃあ行こうかと手を差し出した。

2、私の青年（後書き）

一話です。

読んで下さり、ありがとうございました。v

3、泣くおじさま

なぜか、きゅ、と手を繋いで花畠を再び戻る。
けれども途中で右へと曲がり、そのまますっと進み続けると・・・
そこには、大きなキノコがあつた。

「わあ・・・大きいキノコ！」

おお、と感嘆の声をあげるアリスに、バロヴィルクはくすぐすと笑った。

「確かに、大きいけど・・・君、面白いね」

「え、そ、そうですか？」

「」では、普通なのかな

考えて、ふと思つ。

『』って？

既に、自分の中で、『』の世界は日本ではないと思つてゐる『』と『』気づく。

「そういえば、君、名前は？」

「あ、はい、私、アリスって言います」

と、名前を名乗つた、そのとき、だつた。

「アリス、だと？」

厳かな、声がした。

見れば、いつの間にか巨大キノコにもたれかかるようにして、厳しい印象の男が立つていた。

白い髪は長く、頭上で結い上げており、眼は切れ長で鋭い。

瞳の色は薄い青で、感情のない表情から、その眼はまるでガラス

玉のような印象をうけた。

歳は、40弱ほどだろうか？

青を基調とした少し変わった衣類が、とてもよく似合っていた。

「あの、あなたが蒼さん…？」

アリスが戸惑いがちに声をかけると、男は軽く眉をひそめた。

「あのガキどもから聞いたのか」

「あ、そつか。アイリオをアオつて呼ぶのか彼らしかいないものね」
バロヴィルクがくすくすと笑う。

アリスは、ガキというのがダムとティのことだというのがわかつた。どうやら彼らと、知り合いのようだ。

「彼女ね、君を探してたんだよ。ね？」

「あ、はいっ、あの、金の髪の青年を探してるんです、『存知ないですか？』

軽く首を傾げるアリスに、アイリオは少し考えたのち、再び眉をひそめた。

怒らせたかな…

不安になるアリスの肩に、手が置かれた。
見上げると、バロヴィルクのものだ。

「大丈夫だよ、僕が守つてあげる」

微笑むバロヴィルクの笑みに、アリスは緊張が少しずつほぐれていくのを感じた。

「…知らんな」

キリ、とアイリオはアリスを睨んだ。

「さつさと自分の世界に帰れ」

そして、踵を返して歩いていく…。

「あ、蒼さん！」

後を追おうと、走り出すアリス。だが、走ることは叶わず、一步進んだところで腕に、激痛が走つた。

見ると、先ほどまでの優しげな表情とは打って変わった、厳しい面持ちのバルヴィルクがアリスの腕を掴んでいた。

「君……他の、世界から来たの？」

その表情は、とても真剣で。

アリスは、硬直したように動けないでいた。

怖い

なに？

本能的に、逃げなければならぬと直感した。

「ねえ、君本当に……他の世界から来たの？アリス……」

「ち、ちがう……」

咄嗟に、嘘をついた。

正直に言つては、いけない気がした。

「なんだ……そうだよね」

途端に、バルヴィルクは笑みになる。

「ごめんね、痛かった？」

「だい、じょうぶです」

「そつか」

微笑んで、掴んだ腕を優しくなでてくれるバロヴィルク。けれど、アリスにはもう、その手が暖かいとは思えなくなっていた。むしろ、ただ強くこすられているよつにさえ感じて。

思わず、手を振り払おうとしたとき。

「あれ、アイリオ…どうしたの？」

バロヴィルクの声に、アリスは顔を上げた。見ると、キノコの横にアイリオが立っていた。

「珍しい、戻ってきたんだ」

蒼白になっているだろうアリスの顔を見て、アイリオが顔をしかめる。

そして、厳かな聲音で言つた。

「今、この世界は女王陛下に支配されている」

「それ、僕も話したよ？」

「なぜ、支配されたかわかるか？もう、支配されて20年近く経つ」
アイリオは、バロヴィルクの言葉を無視して話を続ける。
アリスは意味がわからなくて、首を横にふった。

「陛下はお心を、病んでおられるからだ」

「どういう、ことだらう？」

アリスが聞こうと口を開いた丁度そのとき。

「それは、仕方がないよアイリオ」

バロヴィルクが、苦笑して言つた。

「だって、大切なものを臣下に奪われたんだから」

「だって、大切なものを奪われたら嫌じゃないか、と陛下を哀れ

むバロヴィルク。

アリスは、そつと尋ねた。

「たいせつな、ものつて何ですか？」

「さあ、わからない。けれど、皆言つてゐる。誰が言い出したのかはわからぬけれど、大切なものが盗まれたつて。そしてその大切なものは、むこうの世界にあるつて」

先ほどの真剣な表情は、あちらの世界、といふ言葉に共通点を見たからだつたのか。

「ぐだらん、噂だ。信じるな」

「でも、皆言つてゐんだよ？その”大切なもの”を陛下にお返しすれば、治安はよくなるつて。また、昔の平和な国が戻つてくるつてだから、皆探してゐる。少しでも、あちらの世界に関係するものは、全部陛下に献上するんだ。

そう言つて、バロヴィルクは笑つた。

全部

その言葉に、アリスは益々青くなつた。

つまり、全部とはアリス自身も含まれてゐるといふこと……なのだろう。

「それで？金の髪の男を探して、どうするつもりだ？」

呆然としていたアリスはアイリオの言葉にハツと我に返つた。

「あ…えと、なんだか気になつて」

けれど。

もしかしたら、アイリオの言つ通り、もう自分の世界に帰つた方

がいいのかもしない。

このままだと、まずいことになるのかも。

「ふふ、惚れたんだ？ そのひとに」

くすくす笑うバロヴィルク。

「じゃあ、探してあげよっか。一緒に、探そう

「え？」

「暇だし、こよ。僕も、陛下に献上する向こうの世界のものを、探したいし」

「…ありがとう、『ヤコモサ』」

どうしよう、と思つた。

そのとき、ふとあの金の髪の青年が脳裏に浮かんだ。

やつぱり、会いたい。

あの青年を、探したい。

なぜそういうのは自分ではわからなかつたが、たとえ危険であつてもあの青年に会いたかった。

まさか、本当に惚れたのだろうか。

「…ならば、大きな木の所へ行くとい。茶会が開かれているだろ

うから、すぐわかるだろ」

アイリオが、言つた。

「珍しいね。アイリオが助言するなんて」

「帽子屋ならば、お前を助けてくれるだろ」

「あ、また無視した…僕泣いちゃうよ~」

帽子屋？

アリスは、その名前に胸中首をかしげた。
変わった名前だ。

「あの、ありがとうございます…」

アリスが御礼を言つと、アイリオは一度だけ真っ直ぐアリスを見た。
「……幸運を、祈つてゐる」
呟くと、アイリオは再び踵を返し、今度は少しおかへと消えていった。
アリスはその背中を、見えなくなるまで見送つた。

4、ナルシスト&「つわせ

「ところで、大きな木ってどの大きな木なんだろ」とぼとぼとバルヴィルクと歩きつつ、アリスは呟いた。

「大きな木は大きな木だよ。アリスは、知らないのかな」「大きな木っていう、名前なの？」
巨大な木という意味ではなく。

「そうだよ。大きな木は、帽子屋の家の庭にあるんだ」
丁寧に答えてくれて、バルヴィルクは持ち前の笑みをこちらへと向ける。

アリスはあいまいに笑い返し、道を急いだ。

もし

もしもアリスがあちらの人だと知れば、バルヴィルクは間違いなくアリスを女王への献上品とするだろ？

女王のことは、よく知らない。

けれど。

それを思つと、恐ろしかつた。

「帽子屋はね、少し変わってるんだ」

バルヴィルクは、ふと思い至つたように話し出した。

「でも、傍にうさぎがいるから大丈夫だと思つけど。もしかしたら、君に失礼なことを言うかもしれない」

「あ、いえ、そんな…別に」

「ふふ、アリスは優しいね

ぎゅ、とバロヴィルクはアリスの手を握り、つきつきと歩く。微笑まれて、思わずアリスは赤くなつた。
然程美しいというわけではないが、他者を安堵させる雰囲気をもつバロヴィルク。

先ほどのことがなければ、アリスは一瞬でバロヴィルクに惚れていなかもしれない。

花畠を抜けて、丘を越えて…アリスは、歩いた。
すると、遠方に巨大な木が見えた。30メートルほどの中さだらうか。

見たこともない木だ。

「あれが…大きな木?」

「そう、あそこに帽子屋がいるんだ」

アリスは一度深呼吸をして、それから歩調を速めた。

たどり着いたそこには、大きな木が一本あつた。

幹の部分がぐにゃりと曲がつており、テーブルになつている。木には梯子がかけられており、梯子をたどるように上を見上げると、小さな穴が空いていた。

どうやら木の内部は家屋になつてているようだ。

テーブルの上にはいっぱいの時計が散乱しており、隅の方でシル

クハットの帽子を被つた男が一人、カップに紅茶を注いでいた。長い白髪の、男だつた。長い髪は腰まであり、束ねずに垂らしている。紅茶を注ぐ仕草は優雅で、動作のひとつひとつが美しい。

「ほう、と一瞬見惚れてしまつて、慌てて我に歸る。

「こんなにちは。久しふりだね、帽子屋」

バロヴィルクが声をかけると、帽子屋と呼ばれた白髪の男は顔をあげた。

そして、にっこりと満面の笑みを浮かべ・・・こちらへ、歩み寄つてきた。

「やあ、バロじやないか！久しふりだね、どうしたんだい？」

「うん、実は…」

「それよりも！一緒に祝おうじやないか、おめでたい日なんだから！」

「…僕、今日は無視され」

「さあ、お嬢さんもどうぞ！椅子に座つて、はい紅茶。ああ、レモンの方がいいかな？それともアップル？」

帽子屋は素早い動きで椅子をひくと、アリスを座らせて田の前にお茶を出した。

ついでといつたようにバロヴィルクの前にも紅茶を置き、ドン、ドン、アリスの横へ椅子を置いて自らも座る。

どうしようつと迷つていると、帽子屋はしょぼんと少しだけ残念な表情をする。

「おや、紅茶はお嫌いかな？お菓子もあるよ、どうぞ！」

しょぼんとしたのは、一瞬だけ。

すぐに満面の笑みに戻り、お菓子をぐいぐいと勧めてくる。

「あ、あの…ありがとうございます」

どうするべきなのかわからず、とりあえず御礼を言つた。ぱああ、

と帽子屋は満面の笑みになり、うんうんとひとりで頷いた。

「いい子だね、君はー今日はめでたいんだ、無礼講だよー。」

「いつも、だらう?」

バロヴィルクが出された紅茶をすすつゝ、呆れたように呟いた。

「せうともせー毎日がめでたいんだ、祝うべきだ!」

今にも立ち上がりて演説をはじめそうな勢いの帽子屋に、アリスは圧倒される。

ふと、バロヴィルクを見ると、少し機嫌が悪そうだ。

「あ、あの…」

気になり声をかけると、バロは苦笑した。

「こいつは、いつも毎日こいつなんだ。もう20年近くだよ。女王陛下が女王になつたときから、ずっと。世界が滅びそうなのに、僕としてはあまり愉快ではないね」

毎日?

20年近くも、毎日祝つているなんて。

何をそんなに、祝つてているんだろう?.

そんなことを考へてゐるうちに、お菓子が皿の前に置かれた。色とりどりの小さなプチケーキたちが、アリスを誘惑する。

「ああ、畳じ上がれー女の子はこいつたケーキが好きだろ?・遠

慮せず、どうぞ、そして一緒に祝おう。」

ぐう、とアリスのお腹がなる。
よく考えれば、パンケーキ一口以来なにも食べていない。
しかも、すごく甘い匂いがする・・・おいしそうだ。

「大丈夫だよ、食べても」

戸惑うアリスに、バロウイルクが言った。

「帽子屋の出すお茶菓子は美味しいから」

「あの、じゃあ、いただきます」

フォークやスプーンが無いか探してみたが見当たらず、手でつまんで口に入れた。

「美味しい！」

「はは、それはよかつた！－－どんどん皿し上がり、紅茶はストレートかな？それともミルク？」

帽子屋はアリスの返事を待たずに、レモンにアップル、ミルク、ストレート、そしてハーブティまでカップに注いでは、置いていく。紅茶がなみなみと注がれたカップが、アリスの前にどんどん置かれていく・・・アリスは、慌てて声を張り上げる。

「あの、それくらいで十分です！」

「こんなに飲めるはずがない。

というか、カップで皿の前が埋め尽くされていく。

「遠慮はいらない、楽しみたまえ！－！」

戸惑うアリスに、帽子屋は遠慮なくカップを置いていく。
いくつめかのカップを、置いたときだった。

「

やめろ

少女の、可愛らしい声がした。

ぴた、と帽子屋が止まる。

「おや、レフイ。起きたのかい？ならば君も、これからが楽しいお茶会のはじまりだ！」

「黙れ」

可愛らしい声が、低く震える。

声は、木の上からした。帽子屋も木を見上げて、話をしているようだ。

「レフイリアは、つわぎなんだよ」

バロヴィルクが、じつそり耳打ちしてくれる。

「つわぎ？」

「貴様ははしゃぎすぎだ。脳天勝ち割るぞ」

「あははー！手厳しいなレフイはー！紅茶でも飲んで談話しようではないか！そして祝おう、今日といつ日…」

ガゴ、という音がして。

帽子屋の頭部に時計がクリーンヒットした。
バタン、とそのまま帽子屋は後ろに倒れる。

打ち所、大丈夫だらうか。

帽子屋・・・動かないのだけれど。

木の、丁度梯子が掛かっている先。
穴が開いている、その中から…。
ひょこ、と小さい何かが顔をだした。

「おや、客人か。珍しい」
それは咳くと、梯子を伝つて降りてきて…アリスの隣、帽子屋が座つていたところにちょこんと座つた。

それは、少女だった。幼女といったほうがいいかもしないほど、幼い女の子。

普通の2歳ほどの少女なのだが…なんと、頭部に一本の長いうさ耳が生えていた。

確かに、うさぎだわ

バロヴィルクの言つたとおりだ、とアリスは一人納得した。

「痛たた、酷いなレフイは。私が美しいのはわかるけれど、そこまで妬くことはないよーさあ、仕切りなおしだ。お茶会をはじめよう！」

「うるさい」

少女の言葉など聴いていないと「ううん、帽子屋は、一人でお茶会の続きを始めた。

アリスの視界の端で、一人くるくると踊りだしている。

少女は勿論、バロヴィルクも帽子屋を見てみぬふり…少し、可哀想だ。

アリスは、ちら、と隣に座るレフイリアを見つめて…眼が合つた。

「レフイリアだ、宜しく

「よ、宜しくお願ひします」

ふ、と笑うレフイリア。

「ところで、何用か?」

尋ねるレフイリアに、アリスは頷いた。

わういえば、まだ用件さえ伝えていなかつた。

帽子屋に、圧倒されて。

バロヴィルクが、そつとアリスに言つてくれ。

「うさぎに話すとい。彼女は、帽子屋よりよほどまともだからね
まとも、といふ言葉に、アリスはちりりと帽子屋を見て・・・目
をそらした。

まだ、ぐるぐると回つてゐる。

「あの、実は蒼…アイリオさんが、ここに来れば、帽子屋さんが力
になつてくれるから、と

「アイリオが?ふふ、懐かしい名前だ!」

帽子屋が、会話に乱入するよつこつてきた。ぐるぐると回転
しながら、紅茶を注いでいる。

だが、そんな帽子屋にはおかまいなしに、レフイリアは話を進め
た。

「どのよつな事情じや?」

「えと、あの、金の髪の青年を追いかけているんですけど…」

その瞬間、ぴたりと帽子屋が止まつた。

その変わりゆきに、アリスは一瞬ドキリとする。

「金の髪の青年、か。わたしは知らぬが、帽子屋、お前知つてあるな」

レフィリアが、動きを止めた帽子屋を、ちらりと見た。

帽子屋は変わらず不敵に笑つてゐるが、先ほどまでの押しと激しさはない。

「知つてゐるよ。トランプのナイトだ」

「陛下のかい！？」

バロヴィルクが、立ち上がつた。

その勢いに、アリスは驚く。

「そうだ、ハートの女王側近である、トランプのナイト。金の髪の青年といえば、彼たちだけだからね」

「凄い…陛下の側近を見たなんて！いいな、僕も一度拝見したい…さぞ美しい方なのだろうね」

興奮気味のバロヴィルク。

先ほどとは反対に、今度は帽子屋が不愉快そうに眉をひそめている。

今までの愉快さなど、微塵もない、不愉快まるだしの表情に、アリスは一瞬、背筋に冷たいものが走つた。
もしかして。

金の髪の青年の話は、あまりしてはいけなかつたのか。

「…ふむ」

レフィリアは頷くと、ちらりとアリスを見た。

「して？そなたは、何がしたいのだ？」

「え…、あの、青年に、会いたい…なつて」

「惚れたか?…女王の配下のものとなるとやつかいじゃな」

ふと、何かを思い出したように、レフイリアは立ち上がった。
「バロ、じつちへ来い」

そして、バロヴィルクを手招きした。

「家に、そなたの探していた、あちらからきたヘンテコなモノがあ
つたはずじゃ」

「ほんとうに!/?どれだい?」

バロヴィルクは嬉しげに立ち上ると、レフイリアについて梯子
を登つていった。

突然のことに呆然とするアリスをレフイリアは梯子からちらりと
見下ろし、帽子屋を見て…もう一度アリスを見た。

そして、木の中へとバロヴィルクと共に入つていった。

「レフイは気がきくからね、一人きりにしてくれたんだよー。」

帽子屋の一人で落ち着かないアリスに対し、帽子屋は嬉しそうに
告げた。

先ほどの、不愉快な表情は、消えている。

そういうえば…・・・バロヴィルクと帽子屋は、女王に関してはあま
り意見が合わないように思えた。

アリスにはまだよく、わからないが。

そもそも、女王という人物さえ、よく知らない。

「けれど。君は、本当に金の髪の青年を見たのかい？あれは、滅多に女王の傍を離れないはずなのだけれど…」

「でも、あの、森の中で見かけて…」

森、ところの言葉に、帽子屋は首をかしげた。

「なぜ、そんなところに…？」

しん、と辺りが静まり、帽子屋は考える仕草のまま、動かない。黙つてしまつた帽子屋に、アリスは居心地が悪くて何気なくテーブルを見回した。

あちこちに時計が置かれていて、‘じゅわ’‘じゅわ’している。

お茶にケーキ、クラッカーらしきものの残骸まである。

「……あの、何を祝つているんですか？」

ふと氣になつていたことを、何氣なく言つてみた。

帽子屋は満面の笑みになり、ふふんと不敵に笑つた。

「それはね、おめでたいからだよー。」

「おめでたい…？女王陛下が、支配されて滅びそうなのに…？」

「それはそれ。これはこれ。私が祝つてるのは、先の陛下の」と
だ

帽子屋は、今までの笑みが演技であったかのよつて、本当に嬉しそうに微笑んだ。

心から、幸せやうな笑みだ。

「もつと詳しく述べば、アリスの誕生だよ！ああ、アリス、彼女が生まれて20年近く。きっと今頃すくすくと淑女に育つていいことだわうーー」こんなに素晴らしいことわぬ。毎日でも祝うべきだよ！」

アリス、といふ言葉に、アリスは背筋が凍るのを感じた。

4、ナルシスト&「つむぎ」（後書き）

少し長くなつてしましました。。。。

5、アリス

「アリス、つてこりのは、前王の第一子のじだよ。つまつ、皇女

震える声で呟くと、帽子屋は微笑んで答えてくれる。

「アリス、つてこりのは、前王の第一子のじだよ。つまつ、皇女さま。今の女王の姪になるのかな」

ふふ、と笑う帽子屋。せ、とアリスは安堵する。

なんだ。

一瞬、自分のことかと思つてしまつた。
十代後半な自分なこともあり、歳も近い。
てつくり・・・。

「さて、それはせうと。君、名前は？わたしは、帽子屋。そ、名乗る」としてくる

そう言って、自分で煎れた紅茶を口へと運ぶ。
名乗ることにしている、といつひとせ、偽名なのかな？なんて思つたが、あえて口にはしない。

きっと、理由があるのだらうか。それよりも

名前を聞かれてしまつたが、正直に答へてもいいのだらうか。

「私は・・・私は、アリス、です」

隠しても、仕方がない・・・だらう、と正直に告げた。バロヴィルクには、本名を名乗つてしまつたし。
少しだけ迷つたが、はつきりと告げた。

案の定、ぴく、と帽子屋が動きを止める。

「アリス？…君、が？」

「あのつ、先ほど帽子屋さんが仰ったアリスさんとは、違います。私、皇女じゃないし」

わたわたと告げるも、帽子屋はじつとアリスを見つめてくる。正直、居心地が、悪い。

「そういえば…似てる、気がするね」

「ですから」

違う、と言いかけて。

「君だよ。間違いない。よく見れば、私にはわかる。…君は、あのアリスだ」

「…私は」

話くらい、聞いてくれてもいいじゃない。

違うって、言つてゐるのに。

泣きそつになつて、やつと帽子屋がアリスに気づいて慌てだす。

「ああ、じめん。泣かないで。…でも、君なんだよ。わたしには解るさーそして、アイリオにも」

「……え？」

なぜここ、アイリオさん？

「さつと、彼も、気づいたのだろうね。だから、わたしの元へと寄こした…けど。あまり、関心しないね」

そう言って、帽子屋は立ち上がつた。

傍にあつたポットから、ドボドボとカップへお茶を注ぐ。

「君は、帰るべきだ。元臣た、世界ぐ。陛下に氣づかれる前に、お

帰り」

「どうこつ、意味ですか？よく、わからない……それに、わたし。皇女じゃないし……」

「君は、皇女なんだよ」

そう叫んで。

帽子屋は笑った。

「でも、陛下に氣づかれではないけないよ。氣づかれでは、君は命がない」と思って間違いないだろ？」

「……どうして」

と言しながらも、私は皇女じゃないのこ、と心の中で呟く。

「女王は、恋をしてはならないからだ。その禁忌を犯し、先の陛下は君を産んだ。愛しい男との子を、ね。そしてあちらの世界へ愛の逃避行をしたんだよ……」

「え・・・恋をしてはいけないんですか？」

「そうだよ。でも、恋をしたんだ。スペースのナイトに。そして、罪を犯した」

だから、私は今すぐに帰らねばだ。

言葉とは裏腹に、帽子屋の態度は飄々としている。

アリスは、眉を顰めて相手を見た。

だつて、そんなの信じられるわけないから。

自分は、父と母の子で、ただのアリストだ。

けれど。

確かに、自分でももつ帰るべきだと思ひ。

少し、この世界は怖い。

「でも・・・でも、帰るにしても、どうしたら。森が時折あちらと繋がるとかなんとか聞きましたけど」

この際、皇女がどうとかは、置いていて。

帰るにせよ、どうするべきか。

一刻も早くここを出て、我が家へ帰りたい。

金の髪の青年は、気になるが・・・命に腹は変えられない。

「ふむ、確かに森は時折あちらと繋がるが。それは、あちらがこちらに繋がるのであって、一方通行だ！つまり、あちらからは帰れん！」

「ははっ！」

え？

ええ？

初耳です。

「ど、どうすればいいのー？」

「それは勿論、あちらとあちらが繋がるところに行けばいいのだよ！頑張ってくれ」

「・・・

あれ。

なんか、物凄い他人事。

まあ、他人事だらうが。
でも、でも。

「助けて、下さい…」

「嫌だ…！」

「・・・ですよね」

聞くところによると、女王に手をつけられると大変なことになり
そうだし。

皇女であると信じているアリスと共に行動するのは、まずいのだ
ろ？。

「だが、まあ、仕方がないな。このわたしと共に居たいと願うのは
自然なことだ」

「・・・。・・・へ？」

思わず、間抜けな声が出てしまった。
いきなりナニ言つてるの、このひと。

ちょっと待つて、なんか伝わってない。

言いたいことがズレてる気がする。

「わたしは麗しいから…アイリオのようなオッサンよりも数倍も

ね　ああ、眞までも言わなくてもわかつてこるよ。一皿ほれだらつー！

「・・・」

「仕方が無いな。レンの娘となれば、わたしの娘も同然だ……連れていってやうう、かの谷まで」

谷？

つて・・・もしかして、その谷が、じちりがあちりに通じる場所？

いや、それよりも。

「レンって、パパ！？」

「そうだとモ！親友だからね　レンがスペードのナイト。私がダイヤのナイト。アイリオがクローバーのナイトだつたんだよ丶
ダイヤのナイトって・・・あまり聞きなれない言葉だな、とぼんやり思った。

と、いうか。

思考が、ついていかない。

レンって。

確かに、父の名前だが。

いやいや、あのおつとりした父に限つて。

異世界に住人で、しかもその世界で禁忌の愛ののちに今の世界へ駆け落ちしてきた、なんて。

言葉にしてみると、ありえないから。

本氣で、ありえないから。

まあ・・・レンなんてよくある名前だと黙つし、それは置いといて、お聞きしたいことが

「ああ、わたしのプロフィールを知りたいのだらうへ、わたしは帽子

屋。本名はひ・み・つゝ趣味はお茶会、好きなものは・・・君かな
＼

「かの谷、について知りたいんです。そこへ行けば、わたしは帰れるんですか?」

「・・・冷たいね、アリス。ここは、キヤゝ照れちゃうわゝゝとか言つてくれる」と嬉し

「遠い場所なら、やはり準備も大変だと思つたんです。それに、帽子屋さんにもあまりご迷惑かけられないし」

「・・・。冷たいね、本当に」

ふむ、と帽子屋が傍のビスケットに手を伸ばした。

「場所は・・・遠いよ、かなりね。夜の森を通らなきゃいけないし。それに、陛下の城の近くだしね。正直あまり城には近づきたくないんだけど」

帽子屋は、ポリポリとビスケットを食べながら言った。
「森には、アイツがいるし・・・」

「あいつ・・・って」

誰?

と聞こひとしたとき。

上から声がして、アリスは顔をあげた。

「アリスっ、見てこれ! あちらのものだよ

バロヴィルクだ。

なにやら手に持っている。

「とつとと降りんか!」

「ぎやつ、蹴らないで! 落ちるから・・・ひせき、痛い!」

「誰がひせきだ。レフイリアとこうががあるところに

「元氣だ。

なにやら、レフティリアに頭を蹴られて、バロヴィルクが悶絶して
る。

仲・・・いいのかな？

「じゃあ、出立は明日の朝のこと。今日は泊まつていぐがいい
あはは、と笑う帽子屋に、アリスはペニラと頭を上げた。

「あ、ありがとうございます。すみません、なんか・・・」
「構わないさ。あ、そうそう。行くとき、アイリオを誘つてこいつ
かゝ無理やり引っ張つていこうとvvv
「ふふ、となにやら嬉しそうな帽子屋。

いりへじて。

出発も決まり、なにやら大変なことになつたと思つアリスだが。
こんなときにも、思つ出すのは。

あの、金の髪の青年のことだった。

5、アリス（後書き）

すみません、。。。

大変遅くなりました（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2341d/>

森の国のアリス

2010年10月10日16時30分発行